



復興期の医療

高田 哲
神戸大学大学院保健学研究科



Post-Traumatic Stress Disorder(PTSD)とは何か?

生命の危険を伴う出来事に遭遇し、強い恐怖または無力感を感じた後

- 再体験
(フラッシュバック、反復的で苦痛な夢等.)
- 回避
(過去の出来事を思い出すのを避ける.)
- 覚醒レベルの上昇
(不眠, 怒り やすい等.)

これらの3症状が1ヶ月以上持続し、日常生活の支障になる状態をPTSDと呼ぶ。

幼児や障害のある人のトラウマを 評価する難しさ

- 小さな子どもには時間の概念がない。
- 小さな子どもは自分自身の気持ちを上手に表現できない。
- ストレスの原因が何なのかを理解できない。

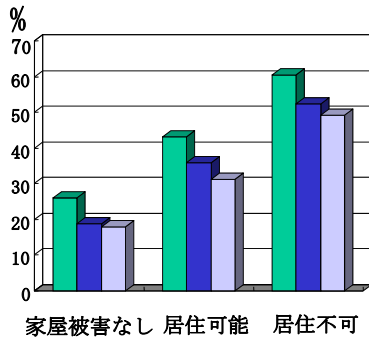
子どもの精神的・身体的症状の チェック表

- | | |
|----------------------|--------------------------|
| 1) 食欲がない | 12) 小さな物音に驚く** |
| 2) 食べすぎる | 13) すぐ怒ったり興奮しやすい** |
| 3) よく便秘あるいは下痢をする | 14) イライラしやすい** |
| 4) よくおねしょをする | 15) 物事に集中できない** |
| 5) ひとりでトイレに行けない** | 16) 指しゃぶりや爪噛みをする |
| 6) 一人で寝られない** | 17) 目をパチパチしたりどもる |
| 7) よく夜泣きをする** | 18) ゼーゼーいうことがある ** |
| 8) 暗いところを怖がる** | 19) 皮膚や目の痒みを訴える** |
| 9) いつも親といたがる** | 20) 自分にできることもやってもらいたがる** |
| 10) 地震について繰り返し話す** | 21) 我慢しすぎている** |
| 11) 地震の話をととても嫌がる。 ** | 22) そのほか何か気になることがある** |

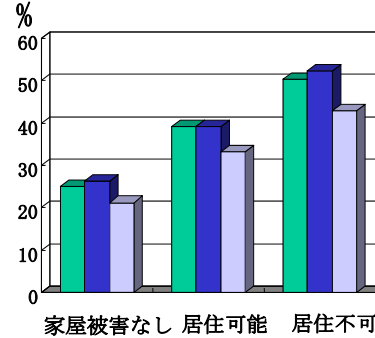
**住宅被害程度と有意な相関が認められた項目 p<0.01 (1年後：青+赤、3年後：赤)

「とても」又は「かなり」と答えた母親の割合と年次推移

突然に震災の時の出来事が蘇える



物音に驚いてびくっとする



災害後に障がいのある子どもを持つ家族は何に困ったか？

	知的・情緒障がい家族 (n:275)	肢体不自由障がい家族 (n:191)
1	食物・水の不足 (n:103)	食物・水の不足 (n:61)
2	電気・ガス (n:51)	電気・ガス (n:27)
3	子どもの介護 (n:26)	医薬・介護用品 (n:20)
4	子どもの興奮・パニック (n:22)	避難場所 (n:16)
5	避難場所 (n:17)	主治医との連絡 (n:14)



自閉スペクトラム症

ー 避難所生活における困難 ー

- 人と上手に関わるできない
- 集団行動がとれない
- 不安を感じたり、思うようにならないとパニックを生じる
- 大きな声で独り言をいう
- 状況を考えない言動のため、周囲の人を傷つける



両親のストレス

- 周囲への迷惑にならないかという心配
- パニック、頻回の夜泣きによって眠れない（他の人々への気遣い）。
- 緊急になすべきことがあっても子どもの介護のためにできない。
- 家族自身の身体的・心身面での不調
- 呼吸・循環器症状、てんかん発作、ぜんそく発作などの合併症に対する不安

阪神・淡路大震災後の身体・精神面 での変化

知的・情緒障害
(n = 275)

身体障害（重複障害）
(n = 191)

睡眠障害	26	睡眠障害	15
排便・排尿	18	排便・排尿	6
興奮	18	興奮	6
食欲不振・過食	8	悪心・嘔吐	4
他傷・自傷	8	他傷・自傷	4
てんかん発作の増悪	8	分離不安	3
分離不安	6	運動能力の低下	3
運動能力の低下	6	感覚過敏	3
元気がない	4	呼吸症状の悪化	3
悪心・嘔吐	4	その他	16
その他	8		

災害時要援護者とは？

- 高齢者、障害者、乳幼児、外国人、妊婦など、援護を必要とする者及びその同伴者
- 災害時に以下の行動が取るのに支援を要する人々
 - ・必要な情報を迅速かつ的確に把握
 - ・災害から自らを守るために安全な場所に避難する



福祉避難所

- ・ 介護の必要な高齢者・障害者などを対象とした避難所
(一般の避難所では生活に支障を来す人に対するケア)
- ・ 要援護者に配慮した設備
(耐震・耐火構造、スロープ、多目的トイレなどバリアフリー化)
- ・ 既存の施設を利用する



阪神・淡路大震災時に障がいのある 子どもを持つ家族が感じたこと

1. 自分自身が子どもの状態を理解することの大切さ
2. 障がい者を想定した避難システムの必要性
3. コミュニティとの交流の大切さ



人々が暮らす地域を主体として支援する

ガジヤマダ大学附属病院 (サルジト病院)



駐車場に溢れる外傷患者

ジャワ島中部地震

- 2006年5月27日に発生.
- 5,716人の死者.
- 3.5~5万人の負傷者が発生.

遊戯療法と描画

- 子どもは自分の気持ちを表す的確な言葉や表現を持たない
- 感情表現ができるための遊びを用いる:
 - 粘土遊び
 - 箱庭
 - 人形・人形の家
 - 色鉛筆・マーカー/紙



Sk /Rc/25/Lms

子ども達への関わり

- (1) 本人にとって「安全で安心な環境」を保証
-信頼できる大人の存在-
- (2) 本人自身がどのようにトラウマの原因となるできごとを認識しているかを知る



- (3) 誤った事実の認識があれば少しずつ修正

(初期段階で無理をして思い出させることをしてはならない)

「子どもの家」活動状況

就学前の子どもを対象としたプログラム



子どもたちへの読み聞かせ
(2007年3月)



お揃いのユニホームは地域の
住民が寄付 (2009年12月)

子どもの家における様々な活動



青少年の廃材を使った
リサイクル活動



乳幼児に対するリハビリ
テーション指導

強調すべき内容

- コミュニティに基盤をおいた包括的で継続的な支援
⇒ 要援護者の存在を意識する
- 災害後の人々の心理・行動予測、要援護者の存在を考慮した準備
⇒ 様々な専門家と身近な人々との連携が重要
- 身近な地域での支援
⇒ 環太平洋地域を含む地域での経験と知識の共有



構成プラン

1. 災害時の要援護者とは？
2. 災害後に見られる心の反応
3. コミュニティに基盤を置いた被災者への関わり
4. 要援護者とその家族に予想される困難
5. 必要なサポート・準備（専門を超えた連携）
6. 専門家と非専門家の協力
7. ビリーブメントケア
8. 海外（環太平洋地域を中心とした）における大規模災害時の経験、知識の共有